

ことばによる親子のスキミングの中で、大切な多くのものが育つことを書いています。私どもはともするとせわしい毎日の生活に追われ、一日一日をクリアするのが精一ぱいという日常を過ごしていて、大事なことや、そのときでなければ再びこないものを片すみに押しやったり、なおざりにしたりしてしまいがちです。どんなに忙しかったとしても多忙と

いう口実を被ってはいはならないし、細やかな心を失ってはならないと思います。小さなことに気づく豊かな感性をもった人間でありたい、そして美しい言葉で語りあえる人間でありたいと、優しい詩を読み、「詩」を大切にしている心ふれて改めて思うのでした。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

大江健三郎 著

『人生の親戚』

(新潮社)

中村 弓子

数年前に私は、この同じ緑蔭図書紹介で、やはり同じ大江健三郎の『新しき人よめざめよ』を紹介した。

この本の主題は、「知恵とともに住んでいる」ともいうべき真の無垢フシエシキを持つ、著者の障害児の長男イーヨーと著者の二十年間の共生の意味をブレイクの子言詩コトコトによって読み取ってゆくこと、そして同時にそのイーヨーをめぐる状況を通して過去二十年間の日本の思想的状況を回顧すること、であった。

そして、最終章「新しき人よめざめよ」に展開する終末論的ヴィジョンにおいて、著者はイーヨーとの共生の究極に、核の時代を通りぬけたその先に、死と復活を可能にする「罪のゆるし」の恩寵のようなものを予感する、と述べていた。

だが、この本で著者がイーヨーとの共生の意味を読み取るために訴えていたのは、終始、ブレイクにおける神そのものではなく、神から派生する宇宙論

的な力をあらかず神人たちの神話的世界であった。そこで、この最終章の恩寵の予感はいったどこにつながっていくものか、「この点は本書において興味深い未知数の要素として残っている。」と私は書いた。

さて本書『人生の親戚』には、まさにその「未知数の要素」が、一種の強烈な光のもとに展開している。

この小説の主人公は著者の友人であり、著者の長男と同じ養護学校に通う障害児を持つ、倉木まり恵という母親であるが、小説全体の出発点にあるのは、交通事故で下半身麻痺した小学生の弟が、その障害児の中学生の兄を誘って、車椅子を押してもらい、二人で伊豆の海の切りたつ崖まで自殺行をする、という信じ難く酷むじい事件である。

『新しき人よめざめよ』は「無垢」をテーマとしていたが、この小説は、中に引用されているイエー

ツの詩にあるように「無垢の祭が水中に消えさつた」ところから始まる。そして母親まり恵が、この過酷な事件の不幸（不幸とはまさに人生につきもの、すなわちスペイン人の言うところの「人生の親戚」である。）から立ち直ろうとする自己救済の歴史は、ちょうど『新しき人よめざめよ』におけるブレークの予言詩プロフェシーと同じように、バルザックの『村の司祭』の女主人公ヴェロニックの罪からの自己救済の歴史に重ねられ読み取られてゆく。しかし、その自己救済の歴史の根本的な原動力となっているのは、まり恵が英文学者として専門に研究している、アメリカのキリスト教作家フラナリー・オコナーの思想である。

オコナーは、すべての感知しえるもの（*sensible*）は、理解できるもの（*intelligible*）であると確信しており、その根底には、キリストがイエスとして受肉したことによって、時間を越えたものが、一時的な現世の肉体と一致したという贖い主

の受肉の秘儀ミステリがある。まり恵は、二人の子の死は酷たらしい感知しえるものだったけれども、とうてい理解しえるものではない、と言う。そして、感知しえるものとしての肉体の快楽による忘我の方向と、秘儀ミステリに触れることによって子供たちの死をも含めて世界を理解しえるもの、としようとする方向の間に、極端に揺れながら自己救済を探索してゆく。

彷徨の末、彼女は、一人の日系人実業家から、メキシコの教会付属の農場で、インディオや混血メティゾの労働意欲を生み出させるための、シンボリックな人物としての役割を演じに来ることを依頼される。それは、大きな災難の犠牲を心にぎざんで、心の慰めを得るために労働に献身している母親という「聖女」の役割である。彼女はそれを引き受ける。そして演技にはじまったと見えたものを、真にせまる生死の舞台のぬきさしならぬふるまいにするために、癌が出現した……この農場での五年間に、彼女が世界を理解しえるものとして受容するに到ったのかどう

か、それはわからない。しかし、著者に送られると知っているヴィデオを撮るとき、彼女は骸骨のように痩せ衰えているがしみひとつない素裸の姿で、右手で不思議なVサインを示し、しかもある華やかさとともに微笑していた。おそらく……この姿は、最後の五年間に彼女がついに秘儀ミステリーに出会って、世界と子供たちの死が了解できるものになったこと、そして裸の肉体も感知しうるものであると同時に了解できるものとして、永遠の世界の扉であることを示しているのではないだろうか。

主人公まり恵は聖書のマリヤ・マグダレナ、すなわち「聖女となった娼婦」のイメージに連なるものを持ち、じつに魅力的に描かれている。またそれは一言で表現するなら「過激な魂」であり、この小説は、彼女が幼年時代に落雷寸前のハルニレの木のかたわらで髪の毛まで感じた、という強い切迫感にも似たものに充たされており、やや「緑蔭図書」という雰囲気にはそぐわないかもしれない。しかしその

切迫感、著者がVサインのヴィデオに対して持つ恐怖と同じように「なにものかとの間の媒介をもくろんだ」ものを前にしたときの稀有の切迫感なのである。

(お茶の水女子大学)

